

# -アベリスツイス研修 報告書-

N. S.

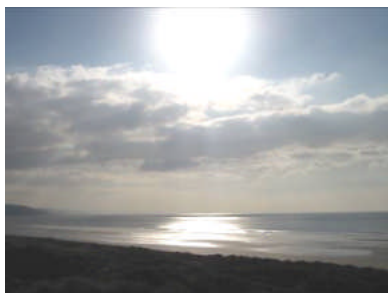


## もくじ

1. ホームステイ
  - (a) Borthの紹介
  - (b) ホストファミリー
  - (c) 生活スタイル
2. 合言葉は「HELLO」
3. PENGLAIS SCHOOL
4. 平和をめざして—
  - (a) あの日を忘れないために
  - (b) POPPYでつながる想い
  - (c) 平和を願い、国が一つになる
5. 日本ではできない経験
  - (a) ウェールズ語
  - (b) 日本との違い
6. この研修を通して学んだこと
  - (a) みんなに求められること
  - (b) 私にできること
7. 感想

# 1. ホームステイ

## (a) Borthの紹介



私は Aberystwyth 駅から車で約 15 分のところに位置している“Borth”でホームステイをしました。Borth はとても海がきれいなのですが、風がすごく強く、波が高いです。特に、夏は多くの人がこの街を訪れるそうです。夏になれば、サーファーで賑い、イルカやアザラシが生で見ることができます。

毎朝、私はかもめの鳴き声で起きていました。これも日本ではあまり経験できないことです。街並みがとてもきれいで、家のひとつひとつが可愛いです。まるで、周辺の家にあわせてデザインされているかのようで、街全体が1つの芸術作品となっています。



ある日の朝、私とMeganで家の近くを散歩していたら、日本ではなかなか見られない巨大ナメクジが現われました。私がビックリしていると、「日本にはいないの？この大きさは普通だよ。」って、言われました。文化も習慣も違えば、生態系も違いました。

この写真は Borth 駅前の住宅街で、Borth でも有名なところらしいです。

ちなみに、このショッキングピンクの家は友達の家だそうです。この住宅街は、おしゃれで個性的なんです！



他にも、たくさん Borth には魅力的な場所があります。スクールバスの停留所に行くために坂を下らなければなりません、下るときが私は一番好きです！なぜならば、海を見ながら歩くことができ、Borth の海岸を眺めることができるからです。自然が多く残っていて、与謝野町に似ている部分があり、すぐに親しむことができました。

## (b)ホストファミリー

### ・Dad

出身:ロンドン生まれ、ロンドン育ち  
性格:声が高く、かわいく、優しい。いつも笑顔☺

お父さんは、大学の先生。仕事から帰って来るとすぐにお母さんと一緒に家事をしている。家事が好きで得意で、料理がとてもうまい！

ちなみに、ウェールズ語があまりしゃべれない。



### ・Mom

出身:スコットランド生まれ、スコットランド育ち  
性格:いつも笑っていて、2階まで聞こえるので、私まで笑ってしまうほど笑い方が豪快！

お母さんは、Penglais schoolの数学の先生。スコットランド人だけど、ウェールズに来てからウェールズ語を習得したらしい。

お父さんと仲がいい！料理がとてもおいしくて、いろんな国の料理を食べさせてくれた。



### ・Megan

Meganはすごく気を遣ってくれて、何でも優しく教えてくれる。彼女は、英語、ウェールズ語、フランス語、スペイン語がしゃべれる。なので、私はMeganと1つの部屋を使っていたので、お互い言葉を教えあいました。積極的に「これは日本語で何ていうの?」と聞いてきてくれたので、コミュニケーションをたくさんとることができました。起きてから寝るまでMeganと一緒に過ごしました。

Meganは男子からも女子からも人気があり、友達がいっぱいいる。ポッキーが好きで、イチゴ味のポッキーに感動していた。



## ・Iwan

Iwan は 13 歳ですが、背が高い。スクールバスではいつも女の子に囲まれていて、男子からも人気がある。ゲームがうまく、ゲームができない私を笑っていた。彼はドラムを演奏したり、サーフィンしたり、サッカーもラグビーもなんなくこなす“nice guy”！お菓子が好き。夕食のときいつも思っていたが、食べるのも速いけど、食べる量もすごい!!



## (c)生活スタイル

朝 7:10 起床

7:40頃 バス停に向かう

8:10頃 学校に到着

↓

夕方 学校帰り

↓

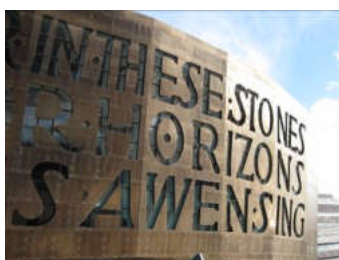
（買い物に行ったり、観光したり、友達と  
写真を撮ったり、遊んだりしました。）

夜 お母さんと料理、ディナー、お風呂、家族とテレビを見る、  
メールを送る、インターネット etc...

## ・テレビでAberystwythが!!

11月11日にBBCをお父さんとMeganと見ていると、アベリスツイスがテレビに出ていました。その時、私とMeganは叫んでいました。

「Oh ! It's Aberystwyth!! Aber,Aber,Aber!!! Yesterday we went here !」



その2日前には、ウェールズの都市であるカーディフが出ていて、そこで世界の中でも大規模なカーレースが開催されたらしいです。生で観戦したかったです。

(←カーディフの有名な建物)

## 2. 合言葉は「HELLO」

私は日本でもそうですが、挨拶を毎日しています。私は外国で挨拶の楽しさや面白さ、気持ちの良さや大切さを改めて感じることができました。

Aberystwyth駅に到着し、ホストファミリーが迎えに来てくれていました。そこでホストファミリーと初めて顔を合わせたとき、「Hello.」から始まりました。

「HELLO」って、すごく不思議な言葉です。そこからすべてが始まっていく“魔法”の言葉です。この言葉は、人と人とを簡単に結びつけます。

(1) Meganの友達を紹介されたとき、「Hello」にプラスして、握手。

これだけで、仲良くなれるのです。その翌日も翌々日も、毎日話しました。



ある日、私はMeganと友達と買い物に行きました。その時、私は気がつくと、Meganと彼女の友だちの中に紛れ込んでいました。また、隣からも前から後ろからも「Natsumi! 」と呼ばれていました。色んな遊びや言葉を教えてもらいました。

(←その時の写真)

(2) Borthの海岸線で犬の散歩をしているおじいさんとおばあさんの集団、毎朝出会うおばさんが「Hello.」と、いつも声をかけてくれました。私は元気良く挨拶を返し、心の底から挨拶が気持ちいいと感じました。

挨拶のおかげで、毎日が気持ち良く始まりました。その1日を楽しくしてくれます。コミュニケーションの始まりは、「Hello」が基本。

だけど、「Hello」だけでなく、スクールバスの中では、「sheep」がコミュニケーションのきっかけにもなりました。最終日の学校からの帰りのバスの中で「羊に会えなくなるから、悲しい。」と言っていたら、座席の前の生徒が「羊レースを見たい?」と、私に聞いてきました。そこから話が盛りあがりました。

### 3. PENGLAIS SCHOOL

#### ★11～12歳クラス



#### 家庭科(cooking)

スコーン作りを手伝いながら一緒に作りました。バナナ味のスコーンを作っていたはずですが、なぜか膨らみパンケーキみたいになってしまいました。その後の片付けも一緒にしました。



そしたら、終わりのチャイムがなり、先生が怒り始めました。先生が怒っていた理由は、準備も作業も遅いことと包丁で指を切った不注意な生徒がいたこと。日本では、なかなか見られない光景でした。(←私のところの失敗作)

#### 英語

彼らは、日本にビックリしていました。私の電子辞書と携帯電話にかなり執着していました。8人の子供に折り紙を教えていたのが、みんな難しかったようで私に折り紙を渡してきたので、結局、私が折るのを見せながら、日本の文化に親んでもらいました！



(↑ 英語クラスで撮影)

## ★17歳クラス(高校2年)

私は Megan のスペイン語クラスに参加しました。スペイン語クラスの教室は結構な広さなのですが、学習生徒はたったの4人で、男子と女子の比率が1:3です。そのクラスには Bella がいたので、授業前に Bella 達と会話をしました。先生がまた面白く、授業は人数的には寂しいですが、楽しかったです。

一番驚いたことは、スクリーンでプリントなどを映して授業を行い、ホワイトボードが壁の上から下までであったことです。

しかも、語学の授業なのに、途中からスペイン史になっていました。しかも、皆がそのことについて話し合っていて、盛り上がっているのです。先生の言うことに意見したり、奥までつっこんだりしていました。

日本に帰ってきたとき、私はそんな自由な授業を受けてから、日本のようにあんな自由のない、重たい空気が流れている授業を受ける気になりませんでした。

## ★学食(ランチ)

学食は、謎なカレーを食べました。味は何か分からなかったけれど、とてもおいしかったです。私の高校にも学食がありますが、Penglais の学食の調理場はとても広かったです。



このとき、私が後ろを振り向くと、私たちの後ろのテーブルで食べていた私と同学年の女の子と何度も目が合うので、笑いあっていました。あとから、少し会話もしました。

## 4. 平和をめざして

### (a)あの日を忘れないために

イギリスだけでなく、フランスやベルギーなども日本と同様に忘れられない日があります。毎年11月11日—その日は『Remembrance Day』といい、第一次世界大戦の終戦日です。

11月11日午前11時またはその日に一番近い日曜日にイギリス全土で2分間の黙禱を戦死者に捧げるのです。

この日の夜に、私と Megan はテレビで Aberystwyth の追悼を行っている場所が映り、騒いでいました。

### (b)POPPYでつながる想い

#### ・POPPY APPEAL(募金活動)

この募金活動は10月の下旬になると始まるそうです。募金されたお金は、戦死者の冥福を祈り、戦死者の遺族や戦争での負傷者、現役の軍人を支援するために使われているそうです。



私は、街でこんな車(写真)を見つけました。そこで、十字架にポピーが貼りつけられている物がありました。

私は Megan からポピーを1つもらいましたが、きちんと自分のお金で募金したかったので、ここではありませんが、私も募金してきました！

#### ・英国王室もニュースキャスターも

毎日テレビを見ていると、胸に真っ赤なポピーをつけているキャスターやタレントが映っていました。また、英国ロイヤルファミリーであり、女王であるエリザベス2世やチャールズ王太子、ウィリアム王子までもが身につけていました。新聞の「〇〇新聞」と書かれている隣にもポピーの姿がありました。



## (c) 平和を願い、国が一つになる

平和を願うPOPPYがイギリスに溢れていました。王室、政界、芸能界は関係なく、誰もが身につけています。街行く人も、もちろん、身につけていました。私は今でもPOPPYをつけています。

POPPYは、ケシ科に属する花で、すごくかわいいです。なぜ平和の花がPOPPYなのか知っていますか？

それは、第一次世界大戦にさかのぼります。最も激しい戦闘が展開され、何千人ものイギリスの兵士が戦死したベルギーのフランドル地方は戦争で荒廃きった土地がありました。戦後に、その土地の一面には真っ赤なPOPPYが咲いたそうです。その真っ赤なPOPPYは戦死者の流した血を連想させたことから、POPPYは平和を願う花になりました。

かわいらしい花の裏には過去の悲劇を表しているなんて思ってもいけませんでした。

日本にも『POPPY APPEAL』のような募金活動があります。その活動は、『赤い羽根共同募金』といいます。現在の募金の使い道は、災害支援や子育て支援金として使われていますが、以前は戦災者の支援のために使われていました。

この募金活動では赤い羽根がもらえますが、人々がつけている姿をあまり見たことがありません。

日本に比べたら、イギリスはすごいです。まるで、国が一つになっているようでした。日本では見るできない光景でした。

## 5. 日本ではできない経験

### (a) ウェールズ語

私が学校でレセプションのスピーチ原稿を考えていると、FlinnとSamが私に「Hey, We teach you Welsh!!」と声をかけてくれたので、教えてもらいました。なので、教えてもらったことを披露します！

#### < ウェールズ語 >

Shwmai,pawb! Fy enw i ydy Natsumi. Japanead dw i.  
Aberystwyth yn dda iawn!! Rydw i'n hoffi Cymru a  
Yosano.  
Diolch!! Hwyl...

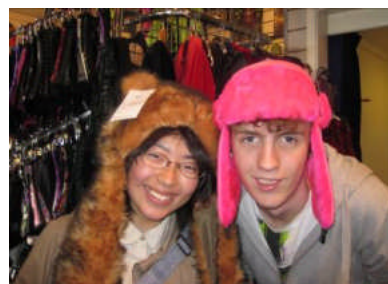
#### < 英語 >



Hi,everyone! My name is Natsumi. I'm Japanese.  
Aberystwyth is very good!! I like Wales and Yosano.  
Thank you!! Goodbye...

ウェールズ語は世界の中でも難しい言語といわれています。その理由は“発音”です。本当に難しいです！私も頑張ってみましたがかなかなか上手にできなかったです。

ちなみに私にウェールズ語を教えてくれた Flinn(=写真右)は名前がウェールズ語の発音をしなければならなくて、彼の名前を正しい発音で呼ぶのに約4日間かかりました。



私は Aberystwyth で英語、日本語、ウェールズ語、スペイン語、フランス語の5カ国語を使っていました。毎日ほとんど英語を話していましたが、簡単な挨拶はウェールズ語でした。スペイン語とフランス語は「ありがとう」程度です。スペイン語は、Penglais の授業を受けた時に、すらすら覚えてしまいました。

Megan や Nathalie、Iona、Michelle、Angharad が私にウェールズ人の“London”のアクセントを教えてくださいました。また、スラングや Dirty word、よく女の子がやる遊びを教えてくださいました。

今思えば、日本の大学でウェールズ語を学べる大学って聞いたことがないです。まったくと言ってよいほどないので、学べてよかったです!!

## (b)日本との違い

日本の学校が嫌になるくらい、自由。私に一番合っている環境でした。

### \* 学校

- ・ 学校にリラックスルームという教室がある。
- ・ 自由にパソコンを使うことができる。
- ・ ほとんどが選択科目
- ・ 教室が科目で違う。
- ・ 授業は60分間
- ・ 1日の授業数が少ない
- ・ 制服は学校の校章が入ったトレーナーかネクタイするだけ
- ・ 私服で登校する日がある。
- ・ 化粧、ピアス、髪の毛の染色をしてもいい！
- ・ 男の子も化粧をする。
- ・ 進路指導がすごい！（聞き入ってしまったくらい）
- ・ 約20カ国の人学校に通っている。
- ・ 男女、みんな仲がいい
- ・ 先生が生徒を真剣に叱る。

### \* 食事

- ・ 野菜の大きさが日本でいう規格外
- ・ 魚にジャムをつけて食べる。
- ・ ジャガイモとパンが主食
- ・ 食べるのがはやい
- ・ 食べる分だけを作る
- ・ 家でリンゴや洋ナシなどの果物を栽培する



## 6. この研修で学んだこと

### (a) みんなに求められること

アベリスツイスで経験したことは、一生忘れることのない、忘れてはならないことばかりです。アベリスツイスの人とアベリスツイスで交流して、たくさんのことを教えてもらいました。もちろん、平和の素晴らしさや偉大さもそうですが、恐ろしい過去が今につながっていることを改めて感じました。

アベリスツイスの人はみんな、とても優しく、親切でした。

「日本人の私を憎いとは思わないのか？」

そもそも、私のその考え方が間違っていました。私のそのような考えが生まれてしまったのは、日本という国には、未だ『差別』があるからだと思いました。

例えば、韓国人に対しての日本人の軽蔑。私は、日本のそういうダメな部分ばかりを目にしてきたから、そういう考えが生まれてしまったのかもしれませんが、**昔のことは昔の、今のことは今の視点で見なければならないのです。**

与謝野町はフランク・エバンスさんでアベリスツイスとつながっています。このことを知っている町民の方は少ないと思います。エバンスさんの捕虜という、**辛く、厳しく、悲しい過去の出来事を受けとめなければなりません。**私はそのことを祖母がよく話してくれたので知っていましたが、さて今はどうでしょうか？

私の祖母世代はそのことを目の当たりにしていたので、一番このことをよく知っている世代です。

しかし、**だんだんとその世代が減少している**ということは、生の体験話を聞けなくなります。だから、学校でも加悦谷でも**そういうことがあった**という事実を忘れないためにも、**どんな方法でもいいので、次世代を担う子供たちに伝えていかなければなりません。**

また、**私たちが作ったアベリスツイスとの絆をより一層深くしていくことが大切だ**と思います。



## (b)私にできること

私は高校で世界史を履修していました。この研修にちょうど出発する前日に、第2次世界大戦とその後の世界の動きを学んでいました。その日、私は研修について考えていました。

「もし、あの時、広島と長崎に原爆が投下されていなかったら、どうなっていたのだろうか。」

そのことを考えていると、エバンスさんのことを思い出しました。エバンスさんにとっても世界にとっても忘れられないことです。

「原爆が落とされなかったら、エバンスさんはもっと苦しく、辛い目にあって、もっとたくさんの仲間を失っていただろう。それよりも、エバンスさんは生きていたのだろうか...」

これこそ、私が一番気になっていたことです。8月15日は日本の終戦記念日。日本の多くの人も辛い経験をしたけれども、エバンスさんのような捕虜の人たちも辛い経験をしていたに違いありません。エバンスさんは終戦を喜んだと思います。

しかし、私は本当のところは喜んでいないのではないかと思います。一緒に捕虜となり、過酷な労働をしいられていた仲間全員と生きて帰られなかった悲しみのほうが強いからです。

エバンスさんには、この与謝野町に強い想いがあったのでしょうか。だから、未来を担う私たちのような世代にアベリスツイスとの絆を築き、また次の世代へ、この関係と絆を受け継いでほしいと願ったのだと思います。

私にできる事は、ずっとアベリスツイスで出会った人と関わり、絆をより深めていくことです。また、エバンスさんが辛く、悲しい目にあった過去のすべてから目を背けないで、自分には何ができるのかを真正面から考えることです。



(↑ ナショナル・ライブラリーからみた Aberystwyth の街)

## 7. 感想

私はこの研修で、たくさんの人に出会うことができました。一人ひとりと会話を  
して、積極的に交流してきました。

役所で出会った議員さんにウェールズのお土産ショップで出会いました。その  
議員さんは、そのショップの経営者でした。徳之島でAETとして働いている娘  
さんと日本を観光した時の写真を見せてくれました。また、お土産を選んでいて

「これは、どんなお菓子なんですか?美味しいですか??」

と聞くと、試食させてくれました。私たちにとても親切にしてくれました。

親切にしてくれたといえば、やはり、ホストファミリーです。たくさんウェールズ  
やアベリスツイスのことを教えてくれたり、美味しいものを食べさせてくれたりしま  
した。伝えたいのに伝わらないことも少々ありましたが、みんな頑張って理解して  
くれました。ホストファミリーには、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

そして、Meganの友だちにも感謝の気持ちでいっぱいです。ウェールズ語を  
教えてくれたFlinnとSamをはじめ、一緒に買い物をして、お茶して、写真を撮っ  
て、YELLOW CAR BASHをしたIonaやMichelleやNathalieたちに感謝の気持  
ちを「また明日がある」と思っていたので、伝えられないまま帰ってきました。

私は、「また明日がある」と思うぐらい慣れていました。アベリスツイスは私に  
最適な環境でした。

数日間、異文化に触れて、私は少し成長したような気がします。私は今まで  
以上に友だち思いになったし、自分の意見をはっきりと言えるようになりました。  
どの国もですが、イギリスでは『Yes.』か『No.』をはっきりと言わなければなり  
ません。『どちらでも・・・』なんて通じません。なので、優柔不断な私でしたが、  
すばやい判断や決断を身につけることができました。

私の夢は4つあります。1つ目は戦場に行くことです。私は大学で国際協力学  
を学んで、戦争・紛争で孤児になった子供をケアしたいです。2つ目はインドを  
放浪することで、3つ目は英語を堪能にすること、4つ目はアベリスツイスと与謝  
野町に何か恩返しをすることです。アベリスツイスとのこれからの関係をどう築き、  
発展させていくべきなのかを考えていきたいです。

私は町民の方々や団長の坪倉さん、通訳の坪倉さんに感謝しています。  
たくさん色んな経験ができたし、平和の大切さも知りました。また、二度と戦争で  
エバンスさんのような犠牲者を出すようなことは許されないこと、それ以前に、戦  
争をしてはいけなと感じました。これらの経験を私の将来に役立てていきたい  
です。本当にありがとうございました。

# アベリスツイス高校生派遣事業

K. I.

## ○応募理由、訪問目的

僕が今回この取り組みに応募した理由は、異国の言語や文化に興味があるからです。なぜそのようなことに興味があるかは自分でも分かりませんが、昔から好きだった洋画、洋楽の影響から来ているのかもしれませんが。しかし、この訪問の目的は、言語や文化を学ぶということではなく、フランク・エバンズさんの伝えたかった「平和」の大切さを学ぶということだと、何度も事前研修会で言われてきました。僕は内心、「せっかくだから、学べるものはすべて学ぼう。」と思いながらウェールズへ向かいました。



## ○アベリスツイスまで・・・

飛行機で約一日、僕はずっとステイ先のホストファミリーのことで頭がいっぱいでした。不安というよりは、すごくわくわくした気持ちで、「どんな家なんだろう？ どんな家族なんだろう？」ということばかり考えていました。最初のほうはとても楽しく飛行機に乗っていましたが、長いフライトだったので、今はもうあんなに長くは乗りたくありません。

バーミンガムからは電車に乗り換えアベリスツイス駅まで向かいました。やはり、どことなく電車の雰囲気も違い、窓の外にはたくさんの羊が見え、「ああ、もう海外なんだ。」と実感していました。

## ○アベリスツイスに着いて

駅に着くと、たくさんのホストファミリーが温かく迎え入れてくれました。初対面にも関わらず、まるで長い仲であるかのように優しく接してくれたので、本当に安心しました。

僕のホストファミリー



ダイディオン

- ・ 将来の夢は軍人
- ・ とても紳士である
- ・ X B O X大好き
- ・ ロックバンド大好き

口癖

「Sweet!!!!」

ホストマザー

- ・ とても穏やか
- ・ 裁縫上手
- ・ 会話大好き

口癖

「Did you sleep alright?」





## ホストファザー (たしかデイビット)

- ・ 市役所に勤めている
- ・ 背が高い
- ・ 英語が聞き取りづらかった
- ・ おもしろい人

口癖

「hahahahaha!!」



## ○ウェールズの食文化

事前にインターネットで調べた情報によると、じゃがいもが多くて野菜はほとんど茹でたものと聞いていましたが、本当にその通りでした。おいしくないという話も聞きましたが、僕のステイ先はとても美味しかったです。(あー良かった。) 日本とは違い主食というものがあまりなく、大きな皿に盛られた料理を自分で取って食べるということが多かったです。また、変わったデザート頂きました。ライスプリンという名前のデザートです。名前の通り、ライスに砂糖やミルクを加えて煮た料理です。温かいうちに食べるのが当たり前らしくて、僕も挑戦してみました。意外といけました。でも、毎日お米を主食としている僕にとっては少し違和感がありました。食文化の違いに少し戸惑った瞬間でした。



何度か外食も食べに行きました。やはり何といても量が多いということにビックリしました。しかも値段が安価なので、「安いから量もそんなに多くないだろうな。」という考え方は大変危険であると思います。外食に関しても、フライドポテトやマッシュポテトなど、さまざまな形でジャガイモが出てきました。日本に帰ったときには、当分ジャガイモ

は食べたくなかったです。



Fish & Chips



学食

## ○ウェールズの学校

僕が数日間通った学校は、園児から高校生まで、幅広い年齢の生徒が通うことができます。(ウェールズでは普通らしい)教科ごとに専用の教室があり、教室移動のために何度も外へ出る機会が多かったです。日本の大学のような雰囲気、授業がないときには待合室で友達と会話を楽しんだりしていました。

教育方法も日本とは大きく異なり、議論や討論が当たり前でした。机や椅子は、生徒同士が顔を合わせられるように、会議のような配置でした。「このことに関してあなたは どう思う?」「僕は～だと思えます。」といったふうに、お互いの意見を交換し合っていたので、会話能力やコミュニケーション能力を上達させる良い勉強法だと感じました。

校内で親しい友達と出会ったら、男女問わずハイタッチをしたり抱きあったりと、日本ではありえない一面もありました。



美術室の壁



授業風景

## ○フランク・エバンズさんのお墓にて

今回の訪問で忘れてはならない目的の一つである、フランク・エバンズさんのお墓参りへ行きました。

戦争を目の当たりにした彼にとって、「平和」とはどのようなものかとずっと考えていました。戦争を知らない僕たちは、「平和」の本当の意味をまだ知らないと思います。彼が味わった辛い戦争や捕虜生活の残酷さを伝えることが、僕に今できる最善の行動だと思っています。

ホストファミリーやその友達と触れ合うことにより、「この人たちを大切にしたい!」と感じました。もし日英で再び戦争が起こったとしたら、彼らと戦わなければならないかもしれません。そのようなことが起こらないためにも、僕は自分なりにできることをして、自分なりの「平和」を願っていきたいです。



「友情の印として」

## ○最後に・・・

今回の研修で本当にたくさんの方のことを肌で感じることができました。ホームステイを通して、言語の違いや文化の違い、言葉では言い表すことのできないことも学ぶことができました。僕の今後の夢を大きく変えるような、本当にすばらしく刺激的な体験をさせて頂きました。与謝野町役場のみなさま、与謝野町民のみなさまには本当に感謝しています。

今回学んだ「平和」について、フランク・エバンズさんの意思を受け継ぎ、一人でも多くの人たちに伝えていけたらなと思っています。そして、この体験を忘れずに、これから先の人生でうまく生かしていきます。

本当にありがとうございました。

## この研修で学んだこと

A. T.

### 1. エバンス氏の本に出会って

私がアベリスツイスを知るきっかけとなったのは母がアベリスツイス友好協会に入った事でした。それまではそんな町がどこにあるのかさえ知らず、与謝野町にこのような交流事業があることさえも知りませんでした。私は、この交流の歴史の背景にはフランク・エバンスという人の存在がある事を知り、「憎悪と和解の大江山」という、この分厚い本を読むことにしたのです。しばらく読書から遠のいていたわたしは、「全部読み切れるかなあ」と、少し不安に思いながら読み始めました。しかし、あっという間に読み切ってしまいました。それは、この本が私にとってとても衝撃的なものだったからです。

読みながらまず感じたのは私の慣れ親しんだこの地にも、確かに戦争があったのだということ。私たちはこれまで、戦争と平和について、多く学んできました。しかしそれら全てはあまり馴染みのない場所で起こったことであり、実感が湧かず、イメージとしての戦争の姿でしかありませんでした。このいかにも平和そうな、田んぼだらけののどかな町にあった戦争を、私は今まで考えたことがありませんでした。読み進めていくにつれて「この町での出来事なんだ。」という思いが私の感情を高め、状況がより生々しくわたしの心に描き出されました。悲しみのようなものと、亡くなった人達への感謝と追悼の思い。そしてエバンス氏への敬服の思い。こんなに複雑な気持ちで戦争と向き合ったのははじめてでした。

この本においてさらに衝撃的だったことは、日本が加害者の立場にあったことです。私は、加害者としての日本を知りませんでした。私ははじめて日本という国を別の角度から見ることができたのです。

その事実を知ったときの私の気持ちは「驚いた」とかいう簡単な言葉で表せるようなものではありませんでした。とにかく「なぜ？」という言葉ばかりが複雑な思いの中から浮上してきました。ショックのあまり本を閉じることができず、毎日寝て通っているバスの中でその日だけは本を読み続けていました。わたしたちがそうであるように、彼にも愛する故郷があり、守るべき家族があり、未来があったんだ。そんなことが、エバンス氏の日記からはひしひしと伝わってきました。人間としての尊厳も権利もない。当たり前前ですが、当たり前ではない。ひとつの命が、まるで道具のように、それもダメになったら捨てるかのように扱われる冷酷で残虐な状況に、日本の行いに対して怒りを覚える場面もありました。しかし私はどちらが悪かったのかということに判決を下すことはできません。なぜなら当時の日本の人達も家族を守るために、国を良くするために、その時代を必死に生きていたからです。自分たちのしていることを疑いの目でみる余地もないほどにそれが正しい道だと思統制により信じ込まされ、天皇という偽りの神のために身を捧げたのです。私は何か悟ったような静かな深い心で思いを馳せていました。「戦争は人を人でなくする」とはまさにこのことなんだ。私はこの言葉の本当の意味を、この本を通してやっと理解できたように思います。

戦争のこととなると、原爆、東京大空襲、沖縄戦など、日本は被害者の立場に立ってしまいがちです。しかし、戦争とは、加害者が被害者であり被害者が加害者であるものだと気付きました。自分たちのしたことをみつめ、考えることは自分たちがされたことを考えるよりも難しく、辛いことかもしれません。しかし、自分の国をどちらか一方からのみではなく、2つの視点に立って見てはじめて、本当の戦争が分かるのではないのでしょうか。まずは本当の“事実”を知ることが大切なのではないのでしょうか。

また、この本の中でわたしが興味を持ったのは宗教についてです。エバンス氏は、希望も何も見えない状況下でも常に神とつながり、希望を得ていました。エバンス氏が常に冷静な目で日本人を見て、静かに捕虜としての生活に耐え続けられたことには宗教が大きく影響していました。食事も少なく、周りの友人が次々と死んでいく中、私なら自己中心的な考え方になってしまうでしょう。それなのに神に祈れるような心の余裕がどこからやってくるのか。おそらく、神の存在が極限状態にある人間にも人を許す心を与え、人の考え方が大きくずれないように倫理的な規律を与え、何よりも希望を与えたのだと感じました。神という存在が人間の心に与える影響について、もっと深く学びたいと思うようになりました。

“許すことはできるが忘れることはできない”

私はエバンス氏のこの心を尊敬し、感謝し続けていきたいです。

私たちは忘れてはなりません。むしろ、その事実を、自ら積極的に学ぼうとする姿勢さえ必要なのです。そして、今の私たちの自由と平和が、いかにして獲得されたかに感謝しなければなりません。

エバンス氏が私たちに伝えようとしていることを何度も何度も咀嚼し、大きくなくてもいいから平和のためにひとりひとりができることを考えていく。そのくらいなら私たちでも今すぐにできると思うのです。



## 2. アベリスツイスにて

実際にアベリスツイスに行って、感動したこと、楽しかったこと、驚いたこと、考えたことといったら、本当に山のようにあつて言いきれません。

まず、これは予想通りだったのですが、言語力の不足はほとんど問題になりませんでした。私が現地で交流してきた人達はみんなとてもフレンドリーで、私がかろうまく伝えられなくても何とか理解しようとしてくれました。初めは、自分があまりうまく話せないことに恥ずかしさを感じていましたが、この際恥を捨ててやるしかないと開き直り、たくさんの人と積極的に話をすることができました。一週間ほどの滞在でしたが、だんだんと聞かれていることを何度も聞き返さなくても理解できるようになり、家族の会話の中にも少しずつ入っていけるようになりました。

ひとつ反省といえば、もっとリアクションの仕方を勉強しておくべきだったということです。わたしは、何かを尋ねられてもとっさには答えられず、口ごもってしまうことが何度かありました。それでも最終的には言いたい事を伝えられたのですが、コミュニケーションの手段としては言葉で伝えることがすべてではないと感じました。いざとなったらボディランゲージがとても大切な役割を果たすとわかりました。そして、もっとおおげさに表現すること。そうすればさらに人とコミュニケーションをとることが楽しくなったかもしれません。

学校帰りにたくさんの友達とにぎやかに町を歩いたこと、ショッピングに行ったこと、花火を見たこと、ある人物の話をして一緒に盛り上がったことなど、思い出たびに現実逃避をしてまた会いに行きたくなってしまいます。向こうの高校生の生活を知ることができ、やっぱり高校生なんだなあ、一緒だなあと感じました。

また、多くの人が日本や与謝野町についてとても興味を持っていたように思います。そこで感じたのは、日本人である私自身が、日本についてあまり知らないなということです。たとえば、空手の話になった時、「空手の帯はどの色順に強いのか？」と聞かれても、黒が一番上としか知らない私は答えられませんでした。ほかにも、今まで考えたことのなかったような“七五三の意味”や“福沢諭吉は何をした人か”などを聞かれ、私も自分たちの文化や歴史についてももっと勉強しなくちゃいけないなあ実感しました。

日本の文化紹介という面では、桃太郎の人形劇をしたことも普通の旅行ではできない特別な体験となりました。日本語の絵本を英訳させていただいた私にとっては、自分の英語をあんなに大勢の方々に見てもらうような機会は今までになく、話が分かってもらえるだろうかと不安な部分もありました。しかし当日は演じる側も見る側もみんなが笑っていて、



とてもよい時間となりました。「鬼」って英語でなんて言うんだらうか？きび団子の説明はどうしたらいいだらうか？そんなことを考えたことで、私にとっても勉強になることが多かったです。

現地には日本語を学ぶ生徒もいて、“元気ですか？”“あなたの趣味は？”などと日本語で質問してくれる人もいました。日本の映画や音楽が大好きな人もいました。彼らが日本について、与謝野町について興味を持って話を聞いてくれたことが嬉しくて、私自身もより自分の住む場所や文化を好きになれた気がします。

現地には日本語教師の方もいらっしやり、こんな仕事もあるんだ!!という感じで、私にはとても刺激的でした。

ウェールズの人達は本当にウェールズという国に誇りを持っているという点もとても印象に残りました。私たちが与謝野町について知っているよりももっと彼らはウェールズについて知っていたように思います。独自の言語であるウェールズ語を大切にしていることにも興味を持ちました。私は人と話すこと、また言語そのものを学ぶことが好きなので、このような、限定された地域のみで話されている言語を勉強してみるのもおもしろそうだなと思いました。ウェールズは芸術で溢れていて私の出会った人達はみんな音楽をやっていました。学校のすぐそばにアートセンターがあり、そこではコンサートや劇がたびたび上演され、町の人達が芸術に触れる機会が多いことにも魅力を感じました。

そして、何ととってもホームステイでの思い出は、言うまでもなく貴重なものとなりました。

私の家族は 7 人もいて、毎日が本当に楽しく、気がついたらもう帰る日という感じでした。最初の日から本当に家族のように接してくれ、感謝の気持ちでいっぱいです。

パパはいつもとっても可愛くて見た瞬間から大好きになりました。サンタクロースみたいでした。毎日いろんな味のはちみつを食べさせてくれておいしかったです。最後の日にパパにもらったラブスプーンは嬉しくて涙が出てしまいました。

ママは食事から洗濯から、本当にお世話になりました。野生のリスを探して森に散歩に連れて行ってもらい、そこで見た紅葉は素晴らしいものでした。

お姉ちゃんのレベッカは私のためにわざわざロンドンの大学から帰ってきてくれました。化粧のことばかり気にしていたけど、すごくかわいかったです。

長男の 15 歳のコナーはずっとパソコンをやって喋ってくれなくて、最初は私の事が嫌いなのかなと思っていました。夕飯をあっという間に食べてすぐに 2 階に上がってしまってママに怒られて食べた後のかたづけをさせられていました。また、勇気をだしておはようといっても答えず、アリスに返事をするように怒られていました。でもどこの家庭もおなじだなあと思ってとても身近に感じ、ほほえましかったです。(というのうちの弟もずっとパソコンをやって母に怒られているからです。)

コナーは劇団にも入っていて、その劇を見に行っただのも良い思い出です。

次男のダックランはとても陽気な 13 歳で、私はいつも笑わせてもらいました。ガールフレンドができた時の彼は、照れながらも嬉しそうで、とてもかわいかったです。

11 歳の妹のニーフはとてもよく私に話しかけてくれて、一緒にウェルシュケーキを作りました。折り紙をととても喜んでくれて私も嬉しかったです。

そして私と同じ年のアリス。一緒にバスに乗って学校に行ったり、化学のテスト（全く分からなかった）と一緒に受けさせてもらったりしたこと、お互いの趣味について話したこと、最後の日にはメイクをしてもらって他のメンバーと一緒にディナーを食べに行ったこと…まだまだあって書ききれないけれど、私はこの思い出を決して忘れません。

アリスにはオーストラリアにおばあちゃんがいて病気で入院しているそうです。そのおばあちゃんが早く元気になることを願って家では毎日ろうそくに火を灯していました。また、ママが子供たちを抱き締めたりすることもありました。私はイメージしていた外国のベタベタしたスキンシップに抵抗を感じていましたが、実際は全然嫌な感じではなく家族の温かさを感じました。むしろそんな風に、いつも家族を愛し、想っている姿をみてそういう習慣を好きになりました。日本では愛を表現するのをためらったりすることはよくありますが、そうやって自分の感情を素直に表現するのも大切だと感じました。

私がこの研修をこんなに楽しめたのは、アリスと家族、また、他のフレンドリーな仲間がいてくれたおかげだと思います。クリスマスにはクリスマスカードと年賀状を送って、アリスとの関係を大切にしていきたいです。来年は与謝野町に来たいとのことで、私もその日が早く来てほしいなあと待ち遠しく楽しみにしています。そして大人になったら、今度は自分のお金でもう一度アベリスツイスにいけたら…と思っています。



### 3. まとめ

この交流は私にとって、人生に影響を与え得るであろう大きなものとなりました。たくさんの方々から私の下手な英語を理解してくれようとしたこと、与謝野町に興味を持ってくれたこと、何よりも外国にはじめての友達ができただけの体験は、わたしが今後どのような道に進もうと必ず生きてくると思います。

ある大学でのオープンキャンパスで、「顔の見える世界地図を作ってほしい」ということを言われたことがあります。その内容はこのようなものでした。

一国と国は遠くてもそこに友達がいたら。

1人でも2人でもいいと思うのです。

海と陸しか描かれていない地図上に友達の顔が散らばっていたら。

遠くの国で起きている、今は他人事として考えていることも、その友達のために、どうにかしたいと思うでしょう。

「その国とは戦争をしないで」と思うでしょう。

そんな小さな思いが、平和を実現させるための種になるのです—

もちろん国家関係とはとても複雑なもので、このように簡単に、理想論のみで平和を維持していくことができるとは考えていません。しかし私たちに、そもそも平和にしたいという思いがなければ何も始まらないのです。あくまでもこれは“種”であり、そこに水を与え、肥料を加え、試行錯誤して平和という花を咲かせることが私たちのこれからの課題です。

私はこの研修を通してこの地図をすこしだけつくることができました。

そして、これからもそれを広げていくこと。

これが私の夢です。



**Consider our blossoms which are beautiful in life and death.**

**Never again let us and human beings die in an ugly holocaust but,  
instead, allow us all to live and die naturally in perfect peace for ever more.**

**“EIEN NO HEIWA”**

# アベリスツイス実績報告書

E. K.



## 1 目的と変化

○“英語を学びたい”それがわたしの応募した目的の大部分を占めていました。わたしは、もともと英語が好きで語学に興味があったので、アベリスツイスに行く目的として、それしか見えていませんでした。

○研修会を重ね、フランク・エバンスさんのことを知っていくにつれて“平和”について考えるようになっていきました。私は、平和ボケをしていて、あまり戦争について深く考えたことはありませんでした。でも、エバンスさんの存在を知り、当たり前のことかもしれないが、この与謝野町でも戦争が行われており、エバンスさんをはじめとするたくさんの捕虜の方々が来られていて、過酷な労働をさせられていた現実を知り、ショックはとても大きかったです。私の住んでいる場所でこんな悲惨なことが…。とても身近に感じ、衝撃は遥かに大きく、“平和”について深く考えるきっかけになりました。英語はアメリカでもオーストラリアでも学べる。でもアベリスツイスでしか学べないこと…。やっぱりそれは“平和”だとおもう。私はそう思うようになっていました。

そういうことを学びながら、“与謝野町の代表として交流を良くしながら、アベリスツイスと与謝野町の平和の輪を広げていきたい”。

そんなふうに、だんだん目的意識が変化していきました。

## 2 マイプレシヤス

### ●ホストファミリー



#### ○ビッキー

- ◎とてもかわいい
- ◎すごく背が高く、おとなびている
- ◎おっとりしていて、穏やかな感じがして、おとなしい
- ◎ファッションが大好きで、すごくおしゃれで、たくさんファッション雑誌を持っている
- ◎絵が好きで美術の授業を選択している
- ◎でも、数学は嫌いらしい
- ◎音楽が好き
- ◎彼氏は、とても明るく真逆のタイプ
- ◎料理がうまい
- ◎すごく優しい



#### ○リズ(ホストマザー)

- ◎すごく美人
- ◎とっても明るく元気
- ◎常にテンションは高め
- ◎よく話しかけてくれ、話すことは好き
- ◎近くの銀行に勤務
- ◎ロンドン出身
- ◎でも、ウェールズ語が少し話せる
- ◎梅干しはお気に入りの食べ物
- ◎好きな日本語は「行きましょう！」
- ◎すごく優しく、いろんなところに気がつく

## ○ニア(下宿人)

- ◎仕事がアベリスツイスにあるのだが、家が遠く下宿をしている
- ◎でも、土曜日と日曜日は家に帰り、家族と過ごしている
- ◎ウェールズ語がうまく、ウェールズに誇りを持っていて、ウェールズについてすごく詳しい
- ◎すごく規則正しい生活を送っている
- ◎日本にも色々興味を持っている
- ◎明るく、面白い
- ◎とっても優しい

## ●色々エピソード

### ◎自分の意見はしっかり言う

自分の意見をしっかり言うこと…。簡単で普通なことかもしれませんが、私にとってはすごく難しいことでした。私は、流されやすい部分もあり、周りの意見に流されることや、場の空気を読んで意見を言うことがたくさんあります。でも、あっちの人は自分の意見は素直にハッキリ言うのが普通であり、すごく衝撃をうけました。

それが裏目に出て、心にグサツとくる場面もなんかありました。でも、裏目に出ればかりではなく、それがすごくいい面に出ることも少なくはありませんでした。「Thank you」(ありがとう)その一言ですごくうれしくなることもありました。

私が、交流バッジや日本のお土産を渡したとき、すごく嬉しそうに「Thank you」と、言ってくれ、私自身喜んでくれてすごく嬉しくなりました。

日本では、ありがとうは礼儀や義務として使うことが多くなっていると思います。感謝の気持ちがうすくなってきていて、なにかをしてくれたら「ありがとう。」という。それが礼儀であり、義務である。なので、気持ちが伝わることは少ないと思います。

でも、あっちの人たちは素直に言ってくれるので、本当に感謝している、喜んでいて気持ちが伝わってくる。私自身それは、すごくいいことだと思います。

自分の意見を素直に言うことは簡単そうで難しいかもしれないけれど、そうすることで、言葉の重みも実感できたと思うし、場の空気を読むことも大切だけれども、自分の意見を言うことも同じくらいに大切であると思い、自分自身を振り返ることができて良かったと思います。

## ◎思いやり

私がアベリスツイスに行き、たくさんの人と出会ったけれど、共通して持つ印象は、“すごく親切である”ということです。私が困っていたら「大丈夫」と聞いてくれる…。私はその一言で助かった場面は、たくさんあったと思います。困っている人がいたら「大丈夫」と、声をかける。当たり前のことかもしれませんが、自分自身振り返ってみて、それができていたかと考えると、あまり出来ていなかったと思います。困っている人を見て、見ぬふりをしていた自分をすごく恥ずかしく思いました。

また、視野を広げ、世界で困っている人たち(災難があった地域、貧困で困っている人たち)にも手をさしのべていてすごいなあと思いました。

ホストファミリーと過ごす時間になっていたある時、学校の近くにある建物にビッキーと行くと、お菓子やたくさんの方が売られていて、私は単なるバザーみたいなものが開かれているのだと思っていました。でも、あとから一緒に行っていた人に聞くと、色々な物を売り、そのお金を困っている人たちにおくるということをしていると、聞きました。そんなことをしているなんて思ってもいませんでした。また、同じ高校生がそんなことをしているなんて…。世界の人たちにまで手をさしのべる。私はそれどころか、まわりのひとたちでさえ視野に入っていない…。改めて自分の小ささに気づかされました。“思いやりの気持ち”や、それを“行動にうつして実践すること”の大切さを実感させられました。私も小さなことからでもいいから、始めていこうと思いました。

・ちなみに…

森林伐採をしないようにも協力していて、家に余分な紙はおいていない

◎バザーの様子



## ◎ポピーの日

アベリスツイスにいる最後の日、11月11日。朝、ママ(ホストマザー)に「ポピー(平和の花)は持った??」と、何度も聞かれました。私は何があるのだろうとおもい、ママに「今日は何かあるのですか??」と聞くと、ママは、「今日は2時になったら、みんな静かに2分間お祈りするのよ。」と言われました。私はなぜお祈りするのかは、分かりませんでした。でも、その時は、あまり深入りはしませんでした。

でも、やっぱり気になり、日本に帰ってきて、調べてみると、その日は第一次世界大戦の終戦日でした。第一次世界大戦で亡くなった人たちの冥福をいのる…。

そんな意味がこめられているとは思いませんでした。

日本で私は、第二次世界大戦の終戦日(8月15日)で、第二次世界大戦で亡くなった多くの人たちの冥福を祈るわけでもなく、特別にすることもなく…。私の戦争や、平和に対する想いが、どれほどすいものであったのかにきづき、すごく反省しました。

私も、これからは8月15日を大切にしていきたいと思いました。



◎ポピーは寄付をしたらもらえる

◎なかにはたくさん持っている人もいる

## 3 ウェールズの文化

### ●学校

学校に入って最初の印象は“自由”でした。本当にその文字通りで、まったく日本の学



校とはちがい、かるいカルチャーショックをうけました。

・日本

◎掃除の時間がある

なので、朝来た時より帰ってきた時のほうが、汚れている。紙飛行機があったり…。

・アベリスツイス

◎掃除の時間がない

◎授業は毎日みっちりある

◎選択制の授業が多いためみっちり授業があるわけではない

◎クラブ活動がある

◎クラブ活動がない

なので、放課後はみんなで買い物にいたりしている。

◎毛染めはダメ

◎毛染めは大丈夫

◎化粧はダメ

◎化粧も大丈夫

逆に、化粧をしていない人のほうが少なく感じた。

◎制服がある

◎日本のようにしっかりした制服はない

日本のように上下しっかりとしたような制服はなく、一週間に一回制服を着ない日があり、その日はみんな私服で学校に登校する。

◎授業で取り扱う外国の言語は英語だけ

◎スペイン語の授業や、ドイツ語の授業がある

◎色々な人種の人はいない

◎すごく多文化

同じ学校に色々な人種の人たちがいる…。日本ではありえないことなので、不思議な感じがするとともに、すごくいいことだと思いました。

ほかにも日本の授業では、“答えを出すために考える”ということがメインで、結果(答え)がすべてという感じがします。でも、あっちの授業は“考えるために答えを出す”ということがメインで、仮定(考えること)を大切にしていました。すごく考えることを大切にされていて、答えに絶対に理由を書いていた。その現場を目前にしてすごく関心をしました。私もこれからは、考えることをメインにしていきたいと思いました。たくさんのがちがいがあり、実際に学校に通っている側としては、驚きや、衝撃は多かったです。また、ビッキーに日本の学校のことを話すと、驚かれることが多く、違いを実感しました。でも共通していることは、授業を真剣に聞いていて、話をしていると先生に怒られる。それは、世界共通なのだと思います。

©Penweddin

ウェールズ語系の学校での数学の授業の様子



©Penglais

英語系の学校で折り紙教室の様子・私が完成する前に完成している子もいて驚きました



## ●食事

- ◎ジャガイモが主食◎油っこいものが多い◎野菜は少ない
- ◎絶対デザートが付いてくる(ライスプリンというものもありました)



すごく量が多かったため、常におなかが良い状態でした。

### ◎ある時の食事の会話

おなかがいっぱいなのに、「デザート食べる??」といわれ、「お腹がいっぱいなので  
いらなです。」と言うと、「じゃあ、1時間後に食べよう。」といわれ、必ずと言っていい  
ほど、デザートを食べました。

## ●ウェールズ語

- ◎ウェールズ語の発音は、ドイツ語に近い様な感じがしました
- ◎英語とウェールズ語の関連性は全くありませんでした
- ◎ウェールズ語と英語で表記してある看板



ウェールズの文化は、どれもみんな良いものでした。文化的で、どれも魅力にあふれて  
いました。それをみんなが愛し、守り続けてきて、それを誇りに思っている…。それ  
はすごく素敵なことだと思います。

私自身、日本の文化について何も詳しく知らなかったのを、すごく恥ずかしいこと思  
いました。これからは、日本の文化についてもよく知っていきたいし、誇りを持っていき  
たいと思います。また、日本の文化を大切にするとともに、ウェールズで学んだ文化も  
たいせつにしていきたいと思いました。

## 4 平和の輪 ～Life without war～

私は以前“自分だけ良ければいい”その考えが、心のどこかにあり、“日本が平和であればいい”そうおもっていました。だから、“日本が平和であることが普通”と、そう思っていて、平和のありがたさが全然感じられませんでした…。

でも、アベリスツイスに行き、フランク・エバンスさんのお墓に行かせてもらったり、ポピーを通して世界の現実を知っていくうちに、“みんな(世界)が平和であればいい”平和に対して視野を広げていくうちに、そう思うようになりました。

当たり前のことかもしれないし、みんなが知っていることだと思うけれども、現実、世界のどこかで常に戦争が行われていて、たくさんの人が苦しんでいて、たくさんの方が戦争によっておとされている…。もっと悲惨なことが戦争にはあると思います。

戦争は、目をそらしたくなるような、つらい現実がたくさんあると思います。

でも、そこから目をそらして何もしないのが、一番ダメなことだと思います。“自分だけでは何もできない”そう自分に言い聞かせて、目をそらす…。そんなことが続いたら、何も変わらないし、悪くなる一方だと思います。確かに、一人で戦争を止めることは、無理に近いと思います。だけど、“知る”ことならだれにもできると思います。“知る”という一歩を踏み出す。その一歩を踏み出すだけで、だいぶ違うとおもいます。なので、最初のその一歩を、踏み出すことから始めてほしいと思います。

過去を見つめたり、現実をうけいれることで“平和の輪を広げる”ということにつながっていくと、私は思います。最初は、自分の住んでいる町。次に日本。その次に世界。私自身、戦争を身近に感じ、自分の町から知っていくこと(視野を広げること)によって、“平和”に対する意識が変わったと思います。なので、私は、アベリスツイスで学んできた“平和”を、一人でも多くの人に伝えなければならないと思います。

また、現実を知り、“自分さえよければいい”“平和であることが普通”その考えを捨てなければいけないと思います。

平和のありがたさを実感することはすごく大切なことだと思います。

そして、それを行動に移すこと。家族や友達を、大切にすること。一秒、一秒を無駄にしないこと。また、世界が平和であることを、望むこと…。そんな小さなことからでも、行動に移すことは、すごく大事だと思います。直接戦争を止めるような行動は、限られていると思うし、私たちにできることは、少ないと思います。でも、生活をしていく中で、ささいなことならできることは、たくさんあると思います。

そんな小さい事(小さい輪)でもやっていくうちに(大きな輪)になっていくと思います。

そして“みんな(世界)が平和の輪”をむすんでいけるようにしていきたいと思います。



## 5 I want...

日本に帰ってきてから“変わった”という実感はありませんでした。でも、確実に変わったものが一つあります。それは“夢”です。

ともに過ごした高校生みんな、それぞれの夢を持っていて、すごく自信にみちあふれていました。私はその姿を見て、みんなすごく自立していると感じました。日本みたいになんとかなく大学に行ったり、就職がないからといって大学に行く、ということはなく、“自分はこうしたい”というハッキリとした夢を持って、大学に行ったり、就職したり…。夢を持つことは、すごくいいことだと改めて実感させられました。

また自分が信じた道をまっすぐ歩いている。これは、簡単そうですがすごく難しいことだと思います。でもあっちの高校生はそれを普通にしている。私自身その姿にすごく刺激を受けました。なので、私も夢を持ち、私がこれから歩く道を信じていきたいと思いました。

## 6 最後に

滞在中の二週間すごく内容の濃いものになったと思います。貴重な体験ができ、色々なことを感じることができました。こんな貴重な体験は個人の旅行では、できなかったと思います。この経験を私の一生の宝ものにしていきたいです。



## アベリスツイス高校生派遣事業実績報告書



H. F.

## ☆ホストファミリーの紹介



Coral (16) 一番左

シューティングがとても得意で、ウェールズの代表になったこともある。音楽が好きで、アルトサクソとフルートが演奏でき、好きなアーティストは、今はやりの KE\$HA らしい。時々テンションがあがりすぎて、いきなり変な行動に出る。万智との変顔が私のカメラにたくさん残っている・・・。

Zoe (18) 真ん中

しっかりしていて、本物の姉みたいだった。送り迎えなど、車の運転でもお世話になった。



Dad (ホストファーザー)

仕事が忙しく、なかなかちゃんと喋る機会がなかったけど、日本の話をすると、しっかりと聞いてくれた。

「CoralQuay Fairtrade」というカフェを経営していて、アクセサリーなども販売しているそう。



Mum(ホストマザー)

見ての通り、とても面白いお母さんで、学校に迎えに来てくれて、モリソンズ (スーパーマーケット) などに連れて行ってくれた。

## 1.生活について

アベリスツイスは私にとってはじめての海外で驚く事ばかりでした。それは、あまりにも日本と違いすぎるという「ギャップ」からのものもあれば、想像としていたものと違い、日本と「同じ」ということもありました。

### 「暖房ではなくて暖炉」

寒い印象が残るアベリスツイスでは、暖房ではなくて暖炉を使っています。可愛いレンガ作りの町並みをよくみると、その一軒一軒には、煙突が付いていて、家に入ると、暖炉を使って生活をしています。環境にはすごくいいし、見習うべきですが、暖炉をたいてもとても寒いのが、デメリットでした・・・。

### 「ただいまのかわりにやあ」

日本では、家に帰った時にただいま！といますが、私のホストファミリーは「Hi (やあ)！」などといった挨拶をしてきました。家に帰ると「おかえり」という言葉もないので、少し寂しい気もしましたが、改めて日本語のいいところを感じた一瞬でした。

### 「習い事や趣味がたくさん」

私のホストファミリーの Coral は、たくさん習い事をしていたので、よく習い事を見学しにっていました。彼女は水泳・シューティング・乗馬といったようなものをしていましたが、学校の友達も、乗馬をやっている人がとても多く、ピアノやヴァイオリン、また、学校のクラブでラクロスをやっているような人もいました。日本では、こんなに多くの習い事や趣味をやっている人を知らないから、ビックリしましたが、そういうことから個性豊かになっているのだな、と思いました。





## 2.学校について

学校では、新しい発見の連続でした。生徒が多人種多宗教なんだろうなあ、ということは人目で分かったし、もちろん先生たちも同じでした。

### 「HR 教室に机がない！」

私が学校に初めて行ったとき、一番衝撃を受けたのが、教室の内装でした。

ソファーが端に寄せてあるだけです。

よくよく見てみると、キッチンがあって、生徒がチェスをしていて、大音量で音楽を流していて、まるで、学校ではなく、ただの集い場所でした。

後々知ることになったけど、HR 教室は本当に集まったりするだけの場所で、授業は自分が取った授業の教室に行ってから受けることになっていました。

日本では、ほとんど自分の教室で授業を受け、それに、どちらかという、ずっと先生の話聞いていて、その内容を板書するような授業ばかりです。

アベリスツイスでは、各授業ごとに、教室が決まっていて、例えば、古典の教室ならあそこにあって……。というような感じでした。

そして、授業内容も、先生が一方向的に話すのではなく、生徒に考えさせ、実践させてみる、というような姿勢がみえました。

私は 11 歳～12 歳の英語の授業を見せてもらったのですが、教室には机がありませんでした。

その授業では、10 人くらいのグループをつくり、配役を決め、1 つの台本を読むということをしていましたが、生徒たちはとても意欲的で、「私はこの役がやりたい！」という主張がはっきりしていて、先生が入る隙もなく、自分たちで授業を作っている様子が印象的でした。



### 3. 食事について

正直にいうと、毎日の食事はたいへん辛かったです。それは、量の問題だけではなく、調理法や味付けが極端なものばかりだったからかもしれません……。

#### 「ライスプディング……」

ライスプディングは、食べたものの中でもっとも記憶・味に残るものでした。

その名の通り、お米でできていて、とても甘いデザートです。

普段お米を主食としていて、お米が大好きな私。

食べてみたらビックリする味でした。お米が甘い！ただそれだけでした。

ただ、ライスプディングに限らず、私のホストファミリーは甘いものが大好きで、食後のデザートは欠かせかったです。

しかし、このライスプディングは別格で、一生忘れられない味になりました。

#### 「いただきます。ごちそうさま。」

食事の挨拶がないのは本当に困りました。いつ食べ始めたらいいかが分からないからです。机に料理が置かれた人から食べ始める、なんていう日もありましたが、日本人としては、作ってくれたホストマザーに申し訳ないので、「いただきます。」を教えました。ホストファミリーは、最初はいただきますが上手くいえなくて、何回も私に「これであってる？」って聞いてきましたが、大事なものは、いただきますの意味を知ってもらうことだと思ったので、ちゃんといえなくても、手をあわせたりするのが、日本では当たり前ということを話しました。いただきますを言うと、ホストマザーがちょっと嬉しそうだったのが、私は嬉しかったです。私が日本に帰った今でもいただきますを言ってくれていたらいいなと思います。



## 4.ホストファミリーとの時間

### 「自分の学費は自分で貯める」

日曜日のフリータイムに Coral は宿題が残っていたので、Zoe に海辺に連れて行ってもらいました。そのときに、たわいも無い話や、日本の話など、たくさんしましたが、一番記憶に残っているのが大学の話でした。以前 Zoe に「仕事は持ってる？」と聞かれたことがあって、私はよく分からなくて、「持っていない」と答えたら、Zoe は「私は3つ掛け持ちしてるの」といっていたことがありました。海辺を歩きながら、その話を詳しく話してもらおうと、その3つの仕事は、全部大学費のためで、大学費は自分で貯めると言っていました。

日本では、高額な費用を親に払ってもらおうというのが当たり前で、大学や専門学校に行くのも当たり前です。

しかし、Zoe の話を聞くと、大学を行かずに、他の国で仕事につく人や、進路は本当にひとそれぞれだということが分かりました。

Zoe の年齢は18歳。私の姉と同じ歳だけに、すんでいる国が違うだけで、こんなにしっかりとした考え方が見に付くのだな、と感心しました。

### 「それってなに？」

ホストファミリーの Coral は、私が日本のことを話すと、「What's this? (それってなに?)」と興味を示してくれます。それが移ったのか、いろんなところに連れて行かれ、いろんな新しいものを見るたびに、「What's this!?!」と口癖のように言っていました。私の知らないことやものはできるだけ私が分かりやすいように説明をしてくれて、最終的に私が理解できなかつたら、私の電子辞書にスペルを打ってもらい、納得するようなことも多々ありました。

私の日本のこれ知ってる?という質問に対して Coral はいつも「Yes.」と「I don't know (知らないわ)」のはっきりした答えをくれます。それがあってか、違うところにすんでいるのだから、知らないのは当たり前。そんなことを自然と教えてくれたのは Coral でした。だから、小さいことでも、どんどん積極的に聞くことができたし、これがつながって、友達にも自分から話しかけたり、コミュニケーションが上手くとれるようになりました。

## 5. フランク・エバンスさんの想いを受けて



これからそれぞれの国を担う高校生が国際交流をする。エバンスさんは、ニッケル鉱山で精神的にも肉体的にも辛い日々を送り、それでも、日本を許す、という選択をしました。

言葉では簡単でも、こうやって行動に移して初めて「許す」ということになるのではないかな、と私は思います。

私の中で、このニッケル鉱山で起こった残虐な事実や、この起こってしまった戦争は最終的に「仕方がない」という言葉で終わってしまいます。

それは、「仕方がない」という言葉にたどり着くまでにたくさんの思っていることや、感じる事はあるけれど、私は戦争を経験していないし、研修に応募するまでこのニッケル鉱山での事実すら知りませんでした。

そんな私が何ができるわけでもなく、世界中を救えるわけもなく、けれど、このアベリスツイスでの国際交流は私でもできることでした。

おかしい考え方もかもしれないけれど、逆に戦争が起こらなかつたら……。と考えるとゾッとすることもあります。

もちろん、こうやって、アベリスツイスでたくさんの人たちに巡り合うこともできなかつたし、最悪私もいなかつたかもしれない。

そう考えると、戦争は「過程」なのではないかな、とも思えます。

これは、戦争を決して肯定しているわけではありません。

戦争が起こつた、この「事実」は変わりようがないから、それなら、この出会いを大切にして、この経験や、戦争を知らない人に伝えていく事が、私の唯一できることじゃないかな、と思います。

起こってしまったことは「仕方がない」

けれど、これから、戦争をなくす方法はいくらでもあると思います。

## 6.研修に参加して

### 「ホストファミリーに感謝！」

初めは不安ばかりだったこのアベリスツイスへの国際交流も、実際現地に行くと、一日一日を過ごすことに精一杯で、あっという間に13日間が過ぎていったな、と今は思います。ホストファミリーには親切にしてもらい、日本でホームステイについての学習をしたときの不安もなくなりました。ウェールズはとてもいい場所です。学校も楽しかったし、景色は綺麗だし、食事のことを除けば、本当に日本に帰りたくありませんでした。私がそこまでなったのは、ウェールズという土地の力もありますが、そこに住むホストファミリーをはじめ、現地の方々、学校の友達や先生が私達を心から受け入れてくれたからだと思います。言葉が通じなくて不便だった時、なんとなく分かり合えたのは、お互いが相手のことをわかろうとして、私の言葉に耳を傾けてくれたからでした。日本での事前学習にもありましたが、英語が分からなくても、コミュニケーションは積極的にとることが大切だと改めて実感しました。特にホストファミリーのみんなは、私のたどたどしい英語を理解してくれ、私が言葉を探すのを待っていてくれました。本当にホストファミリーには感謝でいっぱいの日々でした。私は、いつかもう一度アベリスツイスを訪れ、もう一度ホストファミリーにお礼が言いたいです。初めての海外で、初めてのホームステイで分からない事だらけだったけど、このきっかけをくれたフランク・エバンスさんにも感謝しています。また、必ずアベリスツイスを訪れたいです。



# ○Aberystwyth 研修

M. Y.

言葉が通じない世界へ行くことで、自分はやっていけるのか、自分の英語はどこまで通じるのか、などの不安と別にあっちの生活はどんな風なんだろう、日本に見れないどんなものがあるのだろう、など文化の違いを知りたいという気持ちでいっぱいでした。

わたしがいったのは Gwen の家で、お母さんのジェイニーとお父さんと Gwen と同い年の Menna と弟の Ieuan のいる家でした。お兄ちゃんもいて、隣の家におじいちゃん、おばあちゃんが住んでいるのですが、お兄ちゃんは大学にいて、大家族!ではなく、実質 5 人暮らしのようなものでした。

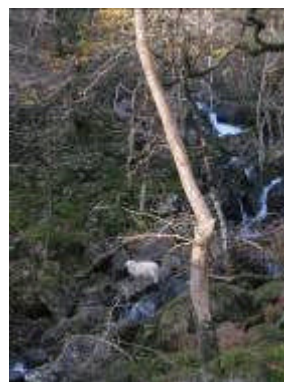
最初は本当に何を話しているか全くわからなくて、最終日までもつか心配でした。

でも、家族の人はすごく私に気を配ってくれて、タオルを毎日準備してくれたり、箸を出してくれたり、くすりを買いに行きたいと言ったらかってきてくれたり、すごい優しくしてくれて生活しやすかったです。

## \* 風景・街並み

やはり見ると聞くでは大違いで、見るものすべてが新鮮。

どこを見てもひつじ、ひつじ、ひつじ!w



↑滝の真ん中にもひつじが!!!!(´Д`)

…ではなくて、360 度どこを見渡しても自然ばかり(\*´`\*)

きれいなところで、街も、海も、空も、夜空も、何もかもがきれい!!

特に忘れられないのが夜空!

寒いからだと言っていたけど本当に小さい星からくっきり見えていて、本当に今まで見た中で一番きれいな夜空でした。—



連れていってもらった海!



家から見た風景



カーディフ

## \* 食文化

かなり量が多いと思っていたけど、案外ふつうでした(´▽`)



家での夕食でミートパイ。この日はひなことカーラも一緒に!☆  
ジェニーが作る料理はとてもおいしくて外食に行くのも  
あまり気がのらないというような感じでした(\*´`\*)

でも!!!

外食はやっぱり多い(´Д`)



FISH&CHIPS

はんばないポテトの量!  
味はけっこう薄め

最終日のインドカレー

量が多すぎてひなこと2人で1つをわけて  
丁度か少し多いぐらいでした

ここのカレーはココナッツか何かの  
甘いカレーがあって、口に合いませんでした(´`)



ほかにも家でライスプディングというプリンのようなものの中に米が入ったものですきになれない味でした(笑)  
でもほかに食べたクッキーやチョコレートはすごくおいしかったです(\*´ω`\*)  
それに、あっちの人はやっぱり食べる量が半端じゃなかった!!  
ご飯の後に大量のおかしを出してくれたのですが、食べれませんでしたww

**\*いろいろ!**



たくさんお世話になったアウエルさん!

このとき私のネクタイがないのは、みんなが私のネクタイが本物のネクタイのようではなく  
とめぐに興味をわいたようでずっといじってました(笑)。

ジムさんにもたくさんお世話になって

車酔いしたとき何度も何度も大丈夫かきいてくれたりとても優しくかった!

まさかの初の乗馬!

乗ったのは、Mennaの馬!



この日はウェールズ建国(?)の日で私は今年初の花火!

音楽がガンガンかかっていた日本とまた違ういい雰囲気で見れました



Gwenの家にはたくさんの動物がいました!

庭もすごく広くて、それが普通かのように多くの家がおおきな庭をもっていました。

家もトイレが3つあったり、シャワーも2つ(3つ?)あったり

それが日本と違うところですよすごい贅沢な暮らしという感じでした。

日本に比べて物価も安いし、暮らしやすいところだと感じました(\*´▽`\*)



## \* 友達♥

こっちへきてすごい感じたのは、ノリが通じること!! (笑)



歓迎レセプションで Coral と



Menna と



Melanie と

この日初めて出会ってすぐ打ち解けた(´`\*)



Coral & Gwen



最終日に駅で  
仲良しの4人で

最初は本当に不安がいっぱいでしたが、ホストファミリーのおかげで過ごしやすく、生活にもすぐ慣れて、とても楽しい毎日を過ごすことができました。

英語も、最初に比べて答え方はあまりわからなくても、何を言っているかはなんとなくわかるようになって自分でも成長したのが分かりました(´▽`)

これからも個人的に交流をつなげていけたらいいなと思いますし、

将来はこの体験を生かして国際的な仕事に就きたいと思っています。

ここでは日本にない美しい大自然があるし、ぜひいろんな人にもってらいたい場所です。

私たち以外の多くの人にももっとこういう交流をしてもらいたいなとおもいました。

これからも絶えることなく交流を続けて行ってほしいです。

かかわったすべての人に感謝します(\*´ω`\*)

本当にありがとうございました。

## 高校生に託された友好と平和

2010年アベリスツイス訪問団引率者

坪倉由貴（与謝野町教育委員会教育推進課学校教育係長）

### 1. はじめに

長い旅だった。与謝野町をマイクロバスで出発し、関西国際空港からドバイ経由、バーミンガムからは列車に乗り換えすでに33時間以上が経過していた。目的地であるアベリスツイス手前のボース駅を発車。あと20分もすると到着、高校生、通訳、随員8名全員がこれから始まるアベリスツイスでの生活に、大きな期待と少しの不安を感じていた。

そんなとき、私たち8名の訪問団は、一人の男性に声をかけられた。「あなたは由貴ですか?」「日本の与謝野から来ましたか。」突然のことに驚きながらも、自分の少ない情報を必死に思い返し、この男性が本事業になくてはならない人物の一人、ジェイク・グッドバンド氏であることにより思い当たり、私たちを一足早く出迎えるため、ご自宅のあるボース駅から列車に乗車くださったことを知った。思いがけない歓迎は心強く、それまで感じていた少しの不安は消え、すばらしい旅がスタートしたのであった。

### 2. 参加のきっかけ

今回のアベリスツイス訪問に、なぜ私が参加させていただくこととなったのか。

2010年8月、本事業の担当課である企画財政課長から役場職員に随員希望調査があった。

担当課の事業を他の部署の職員に体験させるというのは、本人にとってはまたとない機会であるが、担当課にとっては難しいことであっただろう。案の定、私の場合も事前研修からアベリスツイス訪問、報告会まで日程調整、会場・資料の準備、旅行の手配といったあらゆる事務について、担当職員である企画財政課小谷主任に、そのすべてをお世話になった。目的や経過などを理解していないものが参加することで、事業の根幹がずれてしまうのではないかという懸念もあったと思うが、担当課以外の職員に事業の主要部分を任せるといって今回の企画財政課の判断は、行政の行うこととしては極めて珍しく、画期的であると感じた。

私自身、本事業について広報や町ホームページで知り得ること以外は知らず、自分が本事業に関わることになるろうとは想像もしていなかった。それでも本事業に随員したいと考え、応募に踏み切ったきっかけが2つある。

1つ目は、2009年フランク・エバンス氏による「憎悪と和解の大江山—あるイギリス兵捕虜の手記—」の日本語版が、与謝野町アベリスツイス友好協会会長糸井定次氏、細井忠

俊氏の翻訳により出版されたこと。企画財政課より出版の紹介があったので購読した。

与謝野町（交流が始まった当時は加悦町）とアベリスツイスの交流の始まりが、戦争捕虜体験という不幸な歴史に端を発していることを改めて認識し、深い憎しみを乗り越えた先の和解、不幸な戦争を二度とおこさないよう、国際交流、相互理解を深めるため、高校生の交流を始められたエバンス氏のはたらきに感謝し、本事業への関心が増していた。

2つ目は、2010年夏、アベリスツイス友好協会会員様より「友好協会にはいませんか？」と誘っていただいたこと。友好協会の活動については、町の広報や新聞等で、アベリスツイスの高校生の受け入れを行っておられることを知っている程度で、自分が関わるなど思ってもいなかったところへ声をかけていただき、友好協会の活動に目を向けるきっかけとなった。

そんなときの職員への随行希望調査であったため、無関心ではありたくない、何かの意思表示をしなければ、と考えた。何より、多感で物事をよく考え、自分の判断で行動し、社会とのつながりの始まる年頃である高校生とともに行動し、その体験や心の動きなどを間近で感じられるであろうことは魅力だった。

仕事のこと、家庭のことなど考えることも多かったが、職場の同僚、上司、家族からも気持ちよく理解を得ることができ、少し勇気を出して応募に踏み切った。

### 3. 日程・活動の報告

この訪問で素晴らしいと思うことのひとつに、毎朝、集合場所から全員で一日のプログラムを行い、夕方解散。この解散から次の日の朝までは、それぞれのホストファミリーと過ごし、ひとりひとり違った体験をしているということがある。

私の報告は、全員で行動したごく一部。私から報告させていただく以外の部分に、多くの交流、成果があることは6名の高校生の報告により確認いただけたことだろう。

#### 《事前研修》

アベリスツイス友好協会、役場企画財政課のお世話になりながら、5回の事前研修をおこなった。

アベリスツイス、ウェールズについて、フランク・エバンス氏の捕虜体験や与謝野町との交流にいたる歴史について、また自分たちがアベリスツイスを訪問する意味について、考え、学んだ。大江山運動公園の慰霊碑の前での慰霊祭も挙げていただき、ニッケル鉱山乾燥場跡の煙突見学など、毎回時間が足りなくなるほど熱心に取り組んでいた。

歓迎レセプションでの出し物についても、高校生自身の翻訳による日本の昔話「桃太郎」のペープサート劇を行うことを決め、準備した。



ウェールズについて調べたことを発表



慰霊祭



自分は、何を学んでくるのか考える



ペープサート「桃太郎」練習

## 《アベリスツイス訪問》

11月2日 出発

役場野田川庁舎前にて出発式。与謝野町副町長、アベリスツイス友好協会糸井定次会長より激励のことばをいただいた。午後4時45分マイクロバスにて与謝野町を出発。長い移動の日。



ドバイ経由



バーミンガム到着



バーミンガムからは列車



車窓から

11月3日 アベリスツイス到着

ボース駅を過ぎてジェイクさんの歓迎を受け、アベリスツイス駅到着。あたりはもう暗かったが、ホームには、ホストファミリー、アウエルさんはじめ多くの関係者が出迎えてくださった。与謝野町の高校生とホストとのあわただしくも和やかな対面が済むと、全員がそれぞれの家庭に帰っていった。ホストはみな、素敵な高校生で初対面ながらも安心した。この先はもう、私の干渉は及ばない。訪問を終えた9日後、再び笑顔でこの駅を出発

できることを祈り、すべてをホストファミリーと高校生自身に委ねることとした。



ホストと対面

アベリスツイス駅

11月4日 ベレ城・SL乗車

ペングライス校に集合。

キャロラインさん、ジェイクさんご夫妻のミニバスで、1時間半ほどの道のりをベレ城跡へ。ベレ城跡の散策の後、SL列車にて移動。スレート産地とのこと、鉱山跡やトロッコ、たくさんの羊、牛のいる風景は、のどかで美しい。

ホストファミリーに準備していただいたお弁当は、雨風が強いためミニバスの中でいただく。量の多さに驚きながらも、ホストマザーの心づかいに感謝。みんな残して帰るのが申し訳ないと、かなりの無理をしていたようで、私も日本のお弁当とはずいぶん趣の違う、いろいろなお弁当のお裾分けをいただいた。

思えば、アベリスツイスにいた間、ずっと満腹であった。

一日のプログラムを終え、自分がいかにアベリスツイスについて、ウェールズの独特の文化について無知であったか思い知らされた。引率者という立場であるのに、「しまった！」との思いは大きかったが、ここからは、高校生と同じ。少しでも多くを体験し、挑戦し、学ぼうと方向転換した。



このミニバスで移動



ベレ城跡



ベレ城跡



SL 乗車



SL 車窓から



ホストマザーに感謝

11月5日 ペンウェディング校・シティホール

ペンウェディング校で、日本語教室、古典の授業見学。日本語教室の乾史弥（いぬい ふみ）さんは、文部科学省のプログラムでアベリスツイスに赴任されたばかりの先生で、今回の訪問期間中、大変お世話になった。

シティホールで、町長（女性でサムさん）、教育長、ケレディグ議員、ホストのガイディオン君のお父さんの案内で庁舎内を見学。徹底的にエコにこだわった撮影禁止の庁舎は、前回の訪問時は建設中だったとのことで、今回がはじめての訪問だった。

ペンウェディング校に戻り、アウエルさんからアベリスツイスの教育事情について講義を受け、学生食堂でランチ。

午後は、日本語教室の生徒との交流、小学校、幼稚園の様子もを見せていただいた。高校生は、同じ年頃の生徒との交流を楽しみ、自分たちより小さな子どもたちのかわいらしさに夢中で話しかけ、やさしく積極的に接していた。



ペンウェディング校



日本語教室



シティホールで町長らと



ペンウェディング校

### 11月6日 コンサート

昼の間はフリー。高校生は、ホストとともに過ごし、楽しんでた様子。ペングライスのバザーで出会ったり、町ですれ違ったり、お店の中でばったり会ったりした高校生は、それぞれホストやその友達と数人で過ごしており、アベリスツイスでの高校生活を満喫していた。

通訳の坪倉美代子さんと私は、ジェイクさん、キャロラインさん夫妻とボースの美しい海や、丘陵の景色を楽しんだ。

夜は、アートセンターに集合しコンサート。コンサートマスターのウェールズ語と英語の挨拶があり、小学生から年配の方まで 20 数名のハーブ、フルート、ヴァイオリン、歌、タップダンスの多彩なエンタテイメントを楽しんだ。

### 11月7日 フランク・エバンス氏のお墓参り

寒い朝であったが、良いお天気。

連絡ミスで、メンバー1名が遅れるというハプニングはあったが、タリボンの墓地に集合し、全員でフランク・エバンス氏のお墓参り。ホストファミリーも正装で参加くださり、アベリスツイスでも、与謝野町でもフランク・エバンス氏のお墓参りを特別なイベントと

して位置づけていることを実感した。今回の訪問の中で、最も熱心なアウエルさんのお話しの後、私から誓いのことばを申し上げ、坪倉美代子さんに通訳いただいた。全員で「ふるさと」を歌い、永遠の平和と交流の継続をフランク・エバンス氏の墓前に誓った。

その後、徒歩でエバンス氏が通われた礼拝堂に移動した。エバンス氏が寄贈されたオルガンや祭壇の前でエバンス氏を知るというご高齢の方から「戦争から帰還した当時は日本を憎み、戦争体験による精神障害に苦しんでいた彼が、ここで神の教えを学び、日に日に変わっていった。」と話されたことが、エバンス氏の「忘れはしないが、許す。」ということばにぴったり重なり、礼拝堂に満ちた穏やかな光も手伝って、厳粛な気持ちになった。

この日の午後は、それぞれホストファミリーと過ごした。



フランク・エバンス氏墓前にて「平和」を誓う



木材の質感が暖かな礼拝堂

#### 11月8日 カーディフ

約3時間、アウエルさん運転のミニバスでウェールズの首都、カーディフへ。

途中、シャヌーネンの小学校に立ち寄ることができた。フランク・エバンス氏が通った小学校である。アウエルさんが、フランク・エバンス氏について、私たち訪問団について、小学生に話され、全員分厚い学校要覧をいただいた。子供たちは恥ずかしそうで、静かな小さな村であった。

カーディフでは、シティセンターを見学。新旧カーディフ庁舎を見ながら、実は建物の中を案内したいアウエルさんの思いとは裏腹に、高校生はショッピングを熱望。バスでショッピングへ出かけた。洗練された高級なショッピング街で都会の雰囲気を楽しんだ。



シャヌーネンの小学校

カーディフ

#### 11月9日 ペングライス校・歓迎レセプション

ペングライス校にて、進路指導、クッキング、言語棟での授業の見学。クッキングは全員



エプロン姿での参加。言語の授業参観では、与謝野町の高校生による緊急折り紙講座があちこちで始まった。和やかに、しっかり授業に参加させていただいた。

午後は、銀山見学が予定されていたが休館のためフリータイム。

歓迎レセプション。大学構内のホールで40人ほどが集まったのパーティ。サム町長、教育長、アウエル会長からご挨拶いただき、与謝野町長のメッセージを伝え、記念品の交換をおこなった。与謝野町参加者のスピーチ、果敢にウェールズ語でのスピーチに挑戦した高校生もあり、全員がホストファミリーや友好協会への感謝の気持ち等を英語で伝えた。「桃太郎」のペープサート劇も大変盛り上がり、通訳の坪倉さんのオカリナ演奏によるふるさとの歌披露など、暖かく楽しい交流の場となった。



クッキング

何か質問は？



中庭の椿

町長メッセージ

桃太郎披露

あちこちで記念写真

## 11月10日 マキンレス

ジェイクさん、キャロラインさんご夫妻の案内でウェールズで一番古い街、マーケットのあるマキンレスを訪ねた。朝市、ショップを自由に見て周り、有名な銀細工の店にも立ち寄る。途中、ホストファミリーにお会いしたり、ジェイクさん、キャロラインさんの娘さん、お孫さんと合流し、フィッシュアンドチップスの昼食。

その後、CADAIRIDRIS 山へ立ち寄り、少しだけ登山をした。

この夜、通訳の坪倉美代子さんと私はジェイクさん、キャロラインさんのお宅にお招きを受け、乾さんも一緒に、別の日本語教師の及川かおり先生手作りの握り寿司などいただきました。私の45歳の誕生日だとキャロラインさんに話したことを覚えてくださっており、デザートとは別にケーキを作っただき、一生忘れられない誕生日となった。



市場の様子

フィッシュアンドチップス 登山口

ひと休み

11月11日 最後の日

アベリスツイス最後の日。

お世話になったペンウェディング校、ペングライス校への記念品を歓迎レセプションの席でなく、各校に直接贈呈することをアウエルさんから提案いただいていたが、職員会議の時間と私たちの日程が合わず、最終日になってしまった。

とにかくホストたちと時間を過ごしたい様子的高校生と、少しでも多くを見せたい、感じてほしいと多くの場所を案内したいアウエルさん、勤めを果たさなくてはと焦る自分の気持ちの間に差ができてしまったようで反省すべき最終日であったか。

朝、ペンウェディング校で記念品の贈呈。校長は退職されても、学校で講師として数学教室を受け持ち多忙な日々を送っておられるアウエルさんに、学校の様子を見せていただきながら職員会議で記念品贈呈の機会を待った。アウエルさんはこの後、ペンウェディングで「ROLL CALL AT OHEYAMA」を教材として、戦争についての講義とのこと。日々フランク・エバンス氏のことを伝え、平和の尊さを教え、交流の意義を説いておられる熱意、その姿勢に驚き、本事業全体に及ぶアウエルさんの行動力には脱帽の連続であった。私たちは、全員アベリスツイス大学に移動し、リチャードさんという学生さんの案内で大学構内を見学。大学は広く、設備も整っており、短時間で全部を見ることは難しく一部しか見学できていないが、大学生生活を意識している高校生にも良い刺激となったのではないだろうか。

この後、通訳と随行者が滞在したホテルに近い、ウェールズの古い生活様式等を知ることのできる劇場の建物を利用した博物館を案内いただき、アウエルさん含む全員で昼食。

急ぎ、旧シティホール前の桜の木の下で記念撮影。アベリスツイスとの交流の象徴である桜。大きく成長し、写真をはみ出すほどに成長しているが、大切に大切に守り伝えられていた。

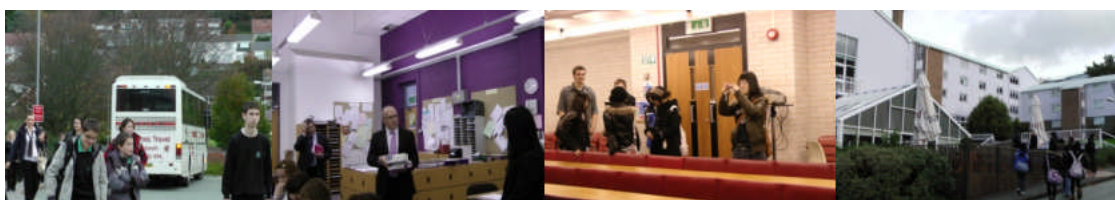
そのまま、大急ぎで国立図書館へ移動。

空調に配慮された素晴らしい施設に、多くの貴重な絵画作品、図書、重要文化財が保存、展示されており、丁寧に案内いただいたものの時間がなく、駆け足での見学は心残りであった。アベリスツイスを一望できる高台にそびえる国立図書館、もう一度訪れてみたい。

午後は、ペングライス校で記念品贈呈。与謝野町からの記念品を渡すだけのつもりであったが、高校生全員に学校のトレーナー、通訳の坪倉さんや私にまで記念品が準備されたおり、その心遣いといよいよ明日に迫った帰国を意識し、涙。今回の訪問では、ペングラ

イス校のホストが多く、訪問期間中集合解散場所として、学校の授業への参加などペングライス校には大変お世話になった。4名のホスト、キャロラインさんの学校であり、今回の訪問期間を通し大変お世話になったペングライスのスタッフであるドナさん、その娘メレリーさんとの出会いもあった。友好協会の新しい会員でもあり出向かえから本事業に参加くださっていたドナさんも号泣されており、再会を誓った。

アベリスツイス最後の夜、高校生はそれぞれのホストと過ごし、通訳の坪倉さんと私は、今回の訪問期間を通し、何度目になるだろう…アベリスツイスの自分の家のように感じるほどになったアウエルさんのご自宅にご招待を受けた。なんと、アウエルさん自身が腕をふるって私たちに料理を作ってください、近くにお住まいのリラさん（アウエルさんの奥様）のお母さんも一緒に過ごすことができた。坪倉さんのオカリナ演奏、みんなでふるさとを歌い…暖かく忘れ難いひとときである。



ベンウェディング通学

記念品贈呈

大学内

大学構内



博物館見学

旧シティホール 桜の木の前で



国立図書館

ペングライス校ドナさん

記念の品をいただく

アウエルさん

### 11月12日 帰国の途

高校生はホストファミリーに、通訳の坪倉さんと私もいつものようにアウエルさんにホテルからアベリスツイス駅まで送っていただいた。早朝であるにも関わらず、多くの関係

者のお見送りを受けた。

あちこちで、笑顔と涙。再開を誓う想いが全員の胸にあり、「さようなら」ではなく「ありがとう」「ありがとう」の別れ。出発まで、私たちの旅を案じ、別れを惜しむ多くの方の顔。名残りは尽きないが、列車発車の時刻はやってくる。多くの方への感謝の気持ちを胸に刻み、帰国の途に着いた。

アベリスツイス訪問を終え、ホストファミリーとの別れの直後、充実感、達成感、自信に満ちた高校生なのびのびとした表情を忘れることができない。いまどきの高校生…、アベリスツイスで何を感じ、何を得たのか、今後の人生にどのように活かすのか。期待に足る表情であった。

ハプニングらしいハプニングもなく、与謝野町の高校生とホスト、アベリスツイスの方々のおかげで、訪問プログラムは無事終了した。自分の立場に悩み、ここ一番で高校生のフォローに勤めなければとがちがちだった私の出番もついぞなく、安堵した。



アベリスツイス駅にて

お世話になったアウェルさん、乾さん、ケレディグ議員

バーミンガム空港で搭乗開始時刻になっても、いっこうに搭乗手続きが始まらない。ひよっとしてそのまま航空機の遅れにより、ドバイでの乗り継ぎができないのではないかと、前回のように、ドバイ一泊ということもあり得るのか、高校生の「帰りたくない症候群」が坪倉にも伝染し、淡い期待を抱いたりもしたが、ドバイでの乗り継ぎも無事、終了した。与謝野町でわれわれの持ち帰る成果を心待ちにし、前回のアクシデントも踏まえ万全の準備をしていただいた、事業担当者小谷主任のおかげであろう。

#### 11月13日 帰国・帰宅

関西国際空港で、アベリスツイス友好協会山崎副会長、吉田参事・企画財政課長、植田主幹、小谷主任のお出迎えを受け、与謝野町に向けマイクロバスで出発。西宮名塩で各自夕食の頃には全員、「お風呂にはいりたい。」「梅干のおにぎりが食べたい。」「自分の布団で寝たい。」

午後9時過ぎ、役場野田川庁舎到着。解散式の後、各自帰宅した。

#### 《事後研修・報告会》

報告会の日程を12月17日と決定いただき、その日までにそれぞれの実績報告をまとめることとなった。訪問に対するアンケート、実績報告書の作成について指導を受ける事後研修をもち、報告会にのぞんだ。

帰国時、参加高校生の表情の変化を感じたものの、果たして自身の交流の楽しさ、ホストファミリーとの思い出以外に、何を感じているのか。事前研修から、「自分のためだけに行くのではない。」「英語が好き。英語の勉強がしたい。というだけならこの研修でなくてもよい。」「公費を使いアベリスツイスを訪問する意味。」「今後の活動につなげること。」を言われ続けてきたが、そここのところはクリアできているのか。自分の考えがまだまとまらないのか、事後研修、アンケートでは、あまり積極的な意見、感想が聞かれなかったことから、報告会、座談会での発表、発言について、不安を感じたというのが正直なところであった。(思えば、失礼な話しである。)

私の不安は杞憂に終わった。報告会での高校生の報告は、見事なものであった。

時間が余ることを想像し、その時間でなにを聞こうか、会場からの質問で何とかつなげなければと、いろいろ考えていたが、それも不要であった。座談会の時間もとれないほど、しっかりと報告を行い、その内容も先に掲載の報告書のとおり、素晴らしいものであった。

#### 4. まとめ

12日間のアベリスツイス訪問で、何かが劇的に変わるということはないのかもしれない。しかし、6名の高校生を含む8名の訪問団員が感じ、行動し、挑戦してきたことは、すべてがエバンス氏の望まれた国際交流、相互理解であり、今後もじっくりと咀嚼され、それぞれの形で将来の糧になることと信じている。

報告書に「戦争を知らない僕たちは、「平和」の本当の意味をまだ知らない」と書いた高校生が「ホストファミリーやその友達と触れ合うことにより、「この人たちを大切にしたい!」と感じ」たと続け、「自分なりにできることをして、自分なりの「平和」を願」い、「フランク・エバンスさんの意思を受け継ぎ、一人でも多くの人たちに伝えていけたら」と結んでいる。すべての高校生が異口同音に同じ想いを報告書に綴り、知った以上、多くの人に伝えなければならないと、自らの使命を報告会で発表した。

くどくど書いてはみたが実は、私が付け加えることは何もないのかもしれない。アベリスツイス訪問を終えた高校生は、事業の意義目的を正しく理解し、それぞれの夢に「平和の実現」を加え、自らの役割を果たそうとしている。

また自分たちのアベリスツイス訪問のために、多くの方のお世話になり、公費が充てられたということも理解し、参加がかなわなかった高校生の気持ちにも思いを馳せ、自身に責任を課している。いまどきの高校生…とひとくくりにしてきた私の至らなさを恥じるば

かりである。

今回、アベリスツイスの多くの場所で、多くの方から日本を、加悦・与謝野町を訪問したときのお話を伺い、自分自身が、息子が、娘がお世話になったからと、熱烈歓迎を受けた。

交流は着実に進み、交流の輪は、旧シティホールの庭に植えられた桜のように、ペンダライス校中庭に4年前、太田町町長が植樹された椿のように大きくなっていることが実感できた。

アベリスツイスへの訪問は、1992年から隔年で実施されており、今回で9回目。訪問の翌年はアベリスツイスからの高校生を受け入れて昨年で9回。46名の派遣と44名の受け入れ、両町合わせて90名の高校生の相互派遣交流が実現している。双方の高校生にとって大変貴重な経験であり、ホストファミリー、友好協会、訪問機関の方々など関係者は、相互派遣交流でつながる大きな輪となる。今回、長い交流の歴史に私たちと私たちのホストファミリーも加わったことに喜びを感じる。感謝の気持ちと、国際交流、相互理解の精神を持ち続け、今後何らかの形で世話になった方々と同じ活動に関わっていけたら幸せである。

フランク・エバンス氏の悲惨な経験に端を発し、捕虜として強制労働を強いられた元軍人と、捕虜を酷使した使用者、その舞台となった小さな町がこのような友好関係に至ったというのは、特異な例である。多くの関係者が、平和の尊さを再認識し、交流が継続されることが、世界の平和につながる大きな力になることと信じる。高校生に託された友好と平和の実現を期待する。

十分な役割を果たしたとは言えない私に、素晴らしい機会を与えてくださったアベリスツイスのみなさま、素晴らしい6名の高校生、通訳の坪倉美代子様、本事業に関わり、お世話になったすべての方に感謝を申し上げたい。

ありがとうございました。